

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370579

研究課題名(和文) 動詞の屈折形態と統語位置に関する通時的・共時的研究

研究課題名(英文) Synchronic and diachronic studies on verb inflectional morphology and its relation to syntactic positions

研究代表者

乙黒 亮 (Otoguro, Ryo)

早稲田大学・法学大学院・准教授

研究者番号：00433201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：異なった言語の構造的特徴を比較対照し、そこに見られる共通点や差異に理論的な説明を与える比較統語論の分野において、時制を標示する定動詞の現れる位置が言語間で異なることは1970年代末より議論されてきている。本研究課題では、生成文法理論において動詞の「移動」として説明が与えられることが多いこの現象に、語彙特性の違いという観点からの提案を行う。さらに当該現象に関する同一言語の方言間の違いや言語構造の経年変化も屈折形態の豊かさの消失という語彙特性から説明ができることを示す。

研究成果の概要(英文)：Comparative syntax attempts to give a theoretical account of similarities and differences in structural properties found across a diverse range of languages. In this field, it has been pointed out since the late 1970s that the position for a finite verb varies across languages. In the generative literature, this difference is often explained in terms of the presence and absence of movement. This research project aims to make an alternative proposal, namely the positional differences can be accounted for by lexical properties of finite verbs. Further, we show that the positional differences triggered by dialectal variations and diachronic change can also be captured by changes in lexical properties.

研究分野：言語学，形態論，統語論

キーワード：形態論 統語論 屈折形態 定動詞 移動 情報構造

1. 研究開始当初の背景

比較統語論において定動詞の統語上の位置が言語間で異なることは 1970 年代末より議論されてきており、理論的枠組みの変化を伴いながら、様々な分析が提案されてきた。例えば (1) と (2) の対比に見られるように定動詞の否定辞や副詞との相対的位置関係が英語とフランス語では異なっている (Emonds 1978)。派生に基づく生成文法では、この違いはフランス語では定動詞が語彙範疇 V から句構造においてより上に位置する機能範疇へ移動するのに対し、英語では定動詞は V 位置にとどまるといふ移動の有無によって説明されてきた。

- (1) a. *John likes not Mary.
- b. *John kisses often Mary.
- c. John often kisses Mary.
- (2) a. Jean (n') aime pas Marie.
- b. Jean embrasse souvent Marie.
- c. *Jean souvent embrasse Marie.

また同様の定動詞の統語的位置の違いがゲルマン諸語の中にも見られることが指摘され、アイスランド語やイディッシュ語はフランス語同様定動詞が移動し、スウェーデン語、ノルウェー語、デンマーク語などのスカンジナビア諸語は英語同様定動詞が V 位置にとどまると分析されている。さらにこれらの言語の移動の有無と屈折形態との関係が議論され、表 1 にあるように移動のある言語は移動のない言語に比べ動詞が複雑な活用パラダイムを構成することが指摘されており、「豊かな一致仮説」と呼ばれる (Rich Agreement Hypothesis; RAE)。

アイスランド語		デンマーク語	
Sg	Pl	Sg	Pl
1	segi segj-um	hør-te	hør-te
2	segi-r seg-ið	hør-te	hør-te
3	segi-r segj-a	hør-te	hør-te

表 1: アイスランド語 *segi-a* 'say' とデンマーク語 *høre* 'hear' の活用

例えば Rohrbacher (1999) は複雑な活用体系を持つ言語は屈折接辞がレキシコンに独立した語彙項目として記載されており、それらが機能範疇主要部に基底生成されることで語彙範疇の動詞の機能範疇への移動を引き起こすと提案している。別の提案では、移動がある言語では機能範疇が 1 つではなく分裂しており (Split-Infl 仮説)、動詞は素性照合のため移動すると考えられている。この場合、活用形の複雑さは分裂した機能範疇の副次的な結果と考えられるため、形態的特性と移動に直接的な関係はないとされる (cf. Bobaljik 2002)。3 つ目の提案では、機能範疇はあらかじめ統語構造に存在するのではなく、定動詞自体の語彙特性によって投射されると仮定し (語彙主義) 活用形の複雑さはその語彙特性

を反映していると仮定される (cf. Koenenman 2010, Holmberg & Roberts 2013)。

2. 研究の目的

本研究課題は、このように移動という統語操作の有無を中心に研究が行われてきた RAH に対し、制約に基づく文法理論 (Constraint-based Grammar) である語彙機能文法 (Lexical-Functional Grammar; LFG) の枠組みで語彙主義的な立場から説明を与え、動詞の形態統語素性・活用体系と語彙項目の統語的特性との関係を明らかにすることを目的とした。LFG では、派生に基づく理論では移動の有無で説明される動詞の出現位置の違いは、元々動詞に指定された範疇が異なっているために、V と I(nfl) という違った句構造上の位置に基底生成されると仮定することで説明される (Bresnan 2001)。しかし、その V と I(nfl) という範疇の違いの原因となる形態統語的特性についてはこれまで一切議論されていない。この問題に対して、申請者は自身の LFG におけるパラダイム基盤の形態論を発展させ、上述したゲルマン諸語および英語の通時的データを対象に、人称素性が活用パラダイムの中でどのように弁別的に具現化されていれば定動詞の範疇が I(nfl) になるかを明らかにすることを旨とした。人称は I(nfl) および IP と深く関係する素性に含まれることから、この狙いは一定の妥当性を持ったものであるが、本研究課題では数、時制といった I(nfl) に関わるその他の素性にも目を向け、より広範なデータを対象に分析を試み、より一般化された枠組みを提示することも視野に入れた。

本研究課題のもう 1 つの目的は、上述の共時的な側面のみならず、定動詞の複雑な屈折形態の消失と統語的位置の変化という通時的な側面にも統一的な説明を与えることである。例えば、Roberts (1993) など中英語から初期近代英語への移行で起こった屈折形態の変化が、定動詞の移動の消失を引き起こしたという提案がなされているが、その際に屈折形態の単純化と統語位置の変化に比較的長い時間的な間隔が存在することが問題となっている。本研究課題では移動の有無ではなく、語彙特性の変化という観点から提案を行うことでこの問題に説明を与えることを旨とした。

3. 研究の方法

本研究課題は 2014 年度から 2016 年度の 3 年計画で行った。「研究開始当初の背景」にも記載した通り、屈折形態と移動操作に関する生成文法による先行研究には大きく 3 つのアプローチが存在するが、とりわけ語彙主義的なアプローチは、定動詞の語彙に指定された情報が統語的振る舞いを決定すると仮定している点において、本研究課題が立脚するアプローチと共通している。しかし、どのような素性がどのように統語的振る舞いを決めるかについては様々な分析があり、対象言語も多岐に渡る。例えば、素性については、素性の他、

T(ense) 素性や D(efinite) 素性も考察対象となり、移動も V-to-I と V-to-C の主要部移動のみならず VP 移動も仮定され、対象言語もゲルマン諸語、ロマンス諸語に加え動詞先行型のケルト系言語などが含まれている (Biberauer & Roberts 2010, Koenenman 2010, Holmberg & Roberts 2013 など)。そこで、これらの先行研究のデータを整理し論点をまとめた。

先行研究の整理を基盤として、対案として単純な屈折形態を示すにも関わらず、定動詞が機能範疇に現れるスウェーデン語の Älvdalsmålet 方言やノルウェー語の Tromsø 方言に関して通時的側面と併せて分析を試みた。また、ロマンス系の言語のバリエーションとしてヨーロッパポルトガル語とブラジルポルトガル語の屈折形態の豊かさや動詞の生起位置に関して両言語の分岐後の変化とともに分析を行った。

さらにより小さい単位の構造における動詞の屈折形態と統語位置との関係を見るために、名詞句内の修飾要素である時制を標示する関係節内と時制を欠く分詞節内に動詞が現れる時の形態統語的振る舞いに関して考察を試みた。

また時制節より大きな構造として CP レベルでの動詞の振る舞いについても分析を行った。例えばゲルマン諸語に見られる定動詞第 2 位 (V2) はしばしば動詞が CP の主要部に位置することで説明されるが、節内各要素の語順が情報構造上の主題・焦点の配置を反映している点が指摘されており (e.g. Zwart 2009)、本研究課題でも情報構造が定動詞の位置にどのように影響を及ぼすのかをその他の関連現象も含めながら分析した。

研究期間終盤にかけてこれらの研究をまとめながら、さらに発展的なテーマとして、定動詞の生起位置の説明には屈折形態の豊かさの消失のみならず、情報構造の VO と OV の語順の変化 (cf. Pintzuk & Taylor 2011) や格と一致の変異への影響を組み入れたより包括的な理論的枠組みを提案する方向性を示し、研究課題の総括とした。

4. 研究成果

LFG は語彙主義の仮定に基づいて言語現象の説明を試みる理論であり、その意味では言語間の動詞の生起位置の違いも定動詞の語彙特性の違いとして捉えるアプローチを取る。本研究課題の大きな成果の 1 つとして挙げられるのは、定動詞の句構造上の位置の違いを統語範疇の違いという語彙特性によるものとして考え、さらにその統語範疇はその動詞が標示する一致のコントローラーの人称素性がどのように弁別されるかによって決定されるという提案を行ったことである。より具体的には人称素性を 1 人称と 2 人称のプル値によって定義し直し、1 人称は 1_+ と 2_- 、2 人称は 1_- と 2_+ 、3 人称は 1_- と 2_- に分解できる。重要な点はこれらは

動詞の活用パラダイムに基づいて指定されるため、同形態 (syncretism) がパラダイム内に起こっている場合は、弁別性が失われる点である。例えば、上記表 1 で示したアイスランド語の動詞の各語形には以下のような素性式が指定されることとなる。

- (3) a. *segi* (SUBJ PERS 1)_{=c}+
 (SUBJ PERS 2)_{=c}-
 (SUBJ NUM)_{=c}SG
 b. *segir* (SUBJ PERS 1)_{=c}-
 (SUBJ NUM)_{=c}SG
 c. *segjum*(SUBJ PERS 1)_{=c}+
 (SUBJ PERS 2)_{=c}-
 (SUBJ NUM)_{=c}PL
 d. *segid* (SUBJ PERS 1)_{=c}-
 (SUBJ PERS 2)_{=c}+
 (SUBJ NUM)_{=c}PL
 e. *segid* (SUBJ PERS 1)_{=c}-
 (SUBJ PERS 2)_{=c}-
 (SUBJ NUM)_{=c}PL

単数においては 2 人称と 3 人称が同形態であるため 2 人称と 3 人称に共通する 1_- のみが指定されるので、*segir* は(3b)のようになる。

本研究課題では比較的広範な言語を対象に動詞の活用パラダイムがどのように具現化されているかをこのプル値による人称素性の表示に基づいて類型化し「豊かな一致」という記述上の一般化がどのように理論的に定義できるかを考察した結果「ある時制において、1 つの数で 1 人称 (1_+ , 2_-) と 2 人称 (1_- と 2_+) が弁別されていること」が要件となることを確認した。そして、その要件を満たす豊かな一致を示す言語の定動詞は I(nfl) という機能的な統語範疇の指定を受け、その結果句構造においてより高い位置に基底生成されることとなる。これは主語の人称という情報を動詞が語彙的に指定することが、その動詞が指定部に主語を持つ I(nfl) という範疇として認定される要件であることを意味している。

ゲルマン諸語はかつてはアイスランド語のように豊かな一致を示していたが、通時的な変化によって徐々にパラダイム内の区別が失われていった。その結果スウェーデン語、ノルウェー語、英語などは定動詞が機能範疇としての要件を満たさなくなり、句構造上低い位置である V にしか生起しなくなったこととなる。よって本研究課題のアプローチでは、動詞の生起位置は、定動詞の語彙特性の変化がもたらしたものであり、それは屈折形態の区別の消失が進んでいくのと並行して起こり、ほぼ完全に豊かな一致がなくなったときに、動詞のレキシコン全体に広がっていくことが予測される。

また屈折形態の通時的な変化は地域差を伴うため、定動詞の位置に方言間で違いが現れることがある。例えば、スウェーデン語は表 1 のデンマーク語と同様活用による主語の人

称区分が失われた言語であり、定動詞は句構造上高い機能範疇には現れない。しかし Älvdalsmålet 方言などでは、動詞が高い位置に生起することが報告されている。動詞の活用体系を見ると、単数では人称区分が失われているが、複数形ではすべての人称で異なった屈折接辞が現れることが確認されており、豊かな一致を維持している。本研究課題の提案に従えば、この方言は完全に人称区分を失う方向へ変化する中途段階ではあるものの、複数形における人称素性の弁別が定動詞を I(nfl) と認定する要件を満たしており、定動詞が高い位置に現れることを認可していると考えられるのである。同様の分析はヨーロッパポルトガル語とブラジルポルトガル語の対比にもあてはまる。ヨーロッパポルトガル語の定動詞はすべての人称と数の組み合わせで同形態は見られず豊かな一致の活用体系を維持しているが、ブラジルポルトガル語では固有の語形は一人称単数のみであり、2 人称複数と 3 人称複数と同形、2 人称単数、3 人称単数、1 人称単数も同形となっており、豊かな一致の要件は満たしていない。この活用体系の違いは統語範疇という語彙的特性の違いとして標示され、定動詞の生起位置の違いを生むと考えられる。この予測通り、否定辞や副詞的小詞、人称代名詞接語との位置関係を基準にして見ると、定動詞はヨーロッパポルトガル語では高い位置に、ブラジルポルトガル語では低い位置に現れることが確認された。

I(nfl) はその指定部の主語に関する素性だけでなく、時制に関する素性も通常担う機能範疇である。よって本研究課題の提案では、I(nfl) として定動詞が語彙的に認定される豊かな一致の言語では動詞が時制を伴わない構造にそのまま現れることができないのに対し、認定されない言語では定動詞が時制を標示しない分詞と同形態となり、時制を伴わない構造にも生起することができると予測する。この予測を確認するため、名詞を修飾する要素として時制を標示する関係節と標示しない分詞構文における動詞の形態に関して考察した。例えば LFG においては機能範疇ではなく語彙範疇に生起すると分析される日本語の定動詞は過去形が時制を持たない帰属用法の修飾要素としてそのまま使われる(「曲がった棒」, 「濡れたタオル」など)。また形容詞においても帰属用法は叙述用法の非過去形と同形である(「美しい景色」 vs 「景色が美しい」)。同様に、英語を始めとする定動詞が機能範疇でないゲルマン諸語においては、大半の動詞の分詞形は定動詞の過去形と同形であり、時制の弁別が失われていることが分かる。しかし、アイスランド語のように定動詞が機能範疇 I(nfl) と認定される言語においては、定動詞がそのまま時制を標示しない統語環境現れることはできず、分詞として名詞を修飾する際は形容詞の活用語尾が義務的に現れる。これらの振る舞いは本課題が提案する語彙特性に

よって説明ができる。研究期間内では限定された言語における観察にとどまっているため、今後対象言語を拡大し、この一般化が通言語的に広く適用可能かどうかを考察する予定である。

最後に時制節よりさらに大きなムード、モダリティ、談話情報が標示されると仮定される CP レベルの領域の分析についても一定程度の成果を上げることができた。派生的な理論では近年カートグラフィにみられるように CP を細分化し、それぞれの機能範疇に特定のムード、モダリティ、焦点、題目などの主要部を設けることで、指定部にその機能を有する要素を認可するというアプローチが多く見られる。しかしロマンス諸語、ゲルマン諸語においてカートグラフィ的なアプローチを取ることの問題点も先行研究で指摘されている(e.g. Neeleman & van de Koot 2008, Zwart 2009)。本研究課題でも日本語における同種のアプローチを批判的に考察し、句構造と並列的にコード化される意味構造や情報構造へ写像される素性を語彙的に指定することで分析が可能であることを示した。また IP 指定部と I(nfl) 主要部の間における素性に相当するような屈折形態で定動詞に具現化されるような素性は CP 指定部と C 主要部の間には存在しないことから、I(nfl) における豊かな一致に対応するような定動詞を C 主要部に基底生成する形態的特性はないと主張し、代わりに CP レベルの定動詞の位置は別レベルで標示される焦点や主題といった情報構造と句構造とのインターフェイスで捉えるべきだという提案を行った。情報構造は句構造のみならず一致や格など様々な言語現象と関わりを持つことが指摘されているが、本研究課題で行った LFG での情報構造の形式化はこれら多様な言語現象への分析の基盤となるもので、今後の研究へ新たな方向性を見出すことが可能となった。

<参考文献>

- Biberauer, T., & Roberts, I. (2010). Subjects, tense and verb-movement. In Biberauer, T., Holmberg, A., Roberts, I., & Sheehan, M. (Eds.), *Parametric variation: Null subjects in minimalist theory* (pp. 263–302). Amsterdam: John Benjamins.
- Bobaljik, J. D. (2002). Realizing Germanic inflection: Why morphology does not drive syntax. *Syntax* 6, 129–167.
- Bresnan, J. (2001). *Lexical-functional syntax*. Oxford: Blackwell.
- Emonds, J. E. (1978). The verbal complex of V'-V in French. *Linguistic inquiry* 9, 151–175.
- Holmberg, A., & Roberts, I. (2013).
- Koenean, O. (2010). Verb movement in Germanic and Celtic languages: A flexible approach. *Lingua* 120, 210–231.
- Neeleman, A., & van de Koot, H. (2008). Dutch scrambling and the nature of discourse

- templates. *Journal of comparative Germanic syntax 11*, 137–189.
- Pintzuk, S., & Taylor, A. (2011). The interaction of syntactic change and information status effects in the change from OV to VO in English. *Catalan journal of linguistics 10*, 71–94.
- Roberts, I. (1993). *Verbs and diachronic syntax*. Dordrecht: Kluwer Academic Publisher.
- Rohrbacher, W. B. (1999). *Morphology-driven syntax: A theory of V to I raising and pro-drop*. Amsterdam: John Benjamins.
- Zwart, J.-W. (2009). Uncharted territory? Towards a non-cartographic account of Germanic syntax. In Alexiadou, A., Hankamer, J., McFadden, T., Nuger, J., & Schäfer, F. (Eds.), *Advances in comparative Germanic syntax* (pp. 59–83). Amsterdam: John Benjamins.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- (1) Otoguro, R. (2016). [Review] Lexical relatedness: A paradigm-based model. *English Linguistics 33*(1): 202–212. 査読有.

〔学会発表〕(計8件)

- (1) Otoguro, R. (2017). Object agreement in Icelandic: Person feature prominence and information structure. The 22nd south of England LFG meeting. School of African and Oriental Studies, University of London, London, the United Kingdom. Feb. 4, 2017.
- (2) 乙黒 亮. (2016). 迂言形の類型から見る形態論と統語論の連続性・非連続性. Morphology and Lexicon Forum 2016. 慶應義塾大学. 2016年9月11日.
- (3) Otoguro, R., & Snijders, L. (2016). Syntactic, semantic and information structure of floating quantifiers. Joint 2016 conference on Head-driven Phrase Structure Grammar and Lexical Functional Grammar. Polish Academy of Science, Warsaw, Poland. Jul. 28, 2016.
- (4) 乙黒 亮. (2016). 一致コントローラーの変異と情報構造. 関西言語学会第41回大会. 龍谷大学. 2016年6月11日.
- (5) 乙黒 亮. (2015). 述語の形態的特性と統語構造. 日本英語学会第33回大会ワークショップ. 関西外国語大学. 2015年11月21日.
- (6) Otoguro, R. (2015). Relative clauses and verb–adjective transposition in Japanese. Workshop on relative clauses: Relatives in East Asia and beyond. Cornell University, Ithaca, the United States. Nov. 15, 2015.
- (7) Otoguro, R. (2015). Tense morphology and argument structure alternations: An analysis

of prenominal modifiers in Japanese. The annual meeting of the Linguistics Association of Great Britain. University College London, London, the United Kingdom. Sep. 17, 2015.

- (8) Otoguro, R. (2015). Generalising functional categories in LFG. The 20th international Lexical Functional Grammar conference. Waseda University, Tokyo, Japan. Jul. 21, 2015.

〔図書〕(計3件)

- (1) Otoguro, R. (2017). Variations in agreement controller and information structure. *Proceedings of the forty-first annual meeting of the Kansai Linguistic Society (KLS 37)*, 241–251.
- (2) Otoguro, R., & Snijders, L. (2016). Syntactic, semantic and information structure of floating quantifiers. In Arnold, D, Butt, M, Crysmann, B., & King, T. H. (Eds.), *Proceedings of the 2016 joint conference on Head-driven Phrase Structure Grammar and Lexical Functional Grammar* (pp. 478–498). Stanford, CA: CSLI Publications. 査読有.
- (3) Otoguro, R. (2015). Generalising functional categories in LFG. In Butt, M, & King, T. H. (Eds.), *Proceedings of the LFG15 Conference* (pp. 250–269). Stanford, CA: CSLI Publications. 査読有.

6 . 研究組織

研究代表者

乙黒 亮 (OTOGURO, Ryo)
早稲田大学・法学学術院・准教授
研究者番号：00433201